

2022.07.01

サステナブル経営 レポート <第 16 号>

小学生向け SDGs 授業プログラムの開発と今後の可能性

【本号の概要】

- MS&AD インターリスク総研株式会社、三井住友海上火災保険株式会社の長野支店南信支社は、伊那市役所、伊那小学校と協力し、小学生向け SDGs 授業プログラムを開発した。本プログラムは、SDGs を理解する上で欠かせない基本的な考え方や内容を、対象者のレディネス（学習の成立に必要な、前提となる知識や経験、心身の準備性のこと）に合わせて伝えると共に、小学校の生活を SDGs の視点から再発見するワークを組み込むことで、SDGs に対する本質的な理解を促す構成とした。
- 開発したプログラムを基に、2022 年 2 月には伊那小学校の 4 年生 1 クラスを対象に SDGs 授業を実施した。新型コロナウイルス感染拡大の影響も踏まえ、講師は MS&AD インターリスク総研のコンサルタントが Web を介して務め、小学校でのファシリテーションはクラスの担任教諭が務める形式で実施した。
- 本稿では、今回開発した小学生向け SDGs 授業プログラムの内容やツールを説明するとともに、伊那小学校における実施事例を紹介する。また、本プログラムの効果、今後の活用による可能性についての見解を述べる。

1. SDGs を自分事として捉える教育の場の必要性と課題

現在、国連が定めた国際目標である SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）への注目が高まっている。SDGs は、将来にわたって誰もが豊かに暮らせる社会を実現するために、2030 年までに全世界において解決すべき課題を見える化したものである。SDGs は 17 のゴール（どのような社会をつくるのか表した意欲目標）、169 のターゲット（そのような社会をつくるために何をすべきか示した行動目標）、そしてそれらの達成度を測るための評価尺度であるインディケーターから構成される。17 のゴールには視覚的にも分かりやすいアイコンが設定されており、多様なステークホルダーが SDGs を共通言語として 2030 年の「あるべき姿」に向けて協働しながら取り組むことが期待されている。

このような文脈の中で、SDGs の達成に不可欠なものとして、ESD（Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育）の重要性が再認識されている。ESD は、気候変動や生物多様性の喪失、資源の枯渇、貧困の拡大といった現代社会が抱える様々な問題について、自らの問題として主体的に捉え、身近なところから取り組む（think globally, act locally）ことで、問題の解決につながる新たな価値観や行動などの変容をもたらし、持続可能な社会を実現していくことを目指す学習・教育活動とされる¹。ESD は、SDGs のゴール 4「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯教育の機会を促進する」のターゲット 4.7 に位置付けられると同時に、SDGs の 17 全てのゴールの実現に寄与するものであることが第 74 回国連総会において確認されている¹。

¹ 文部科学省ホームページ：<https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm>

前述したような背景を踏まえると、SDGs について一方的に伝えるだけではなく、教育の対象者が、SDGs が掲げているあるべき姿やその背景にある問題意識について、自らにとって身近なものとして捉えて取り組むきっかけとなるような教育の場の創出が必要である。

ただし、そのような教育プログラムを開発、さらには実施することは容易ではない。教育の分野においては、レディネスという考え方が存在し、対象者のレディネスに合わせて伝えることが肝要になってくる。SDGs を自分事として捉える教育の場をつくる上でも、教育の対象者のレディネスを踏まえた上で、対象者の生活と SDGs の接点が可能な限り大きくなるような設計が必要となる。

2. 開発した小学生向け SDGs 授業プログラムの概要

今回、MS&AD インターリスク総研株式会社（以下、インターリスク総研）と三井住友海上火災保険株式会社の長野支店南信支社（以下、三井住友海上南信支社）²は、伊那市役所、伊那市立伊那小学校（以下、伊那小学校）と協力し、小学生向け SDGs 授業プログラムの開発を行った。

表-1 に本プログラムの概要を整理した。想定した対象者は小学 4 年生で、説明の内容や表現、ワークの内容、テキストでの漢字の使用、読み仮名の付記においては、その点に配慮した。プログラムの目標は大きく分けて 2 つ設定した。1 つ目は SDGs を理解する上で欠かせない基本的な考え方や内容を対象者に伝えること、2 つ目は SDGs の視点を実際に活用するワークを通して、対象者が SDGs を自分事として捉え行動することを促す機会を提供することである。授業は「座学」、「ワーク」、「まとめ」の 3 つのパートから構成し、全体で 150 分程度の設計とした。

表-1 開発した小学生向け SDGs 授業プログラムの概要

想定している対象者	・ 小学4年生 ・ ただしアレンジによっては別学年にも対応可能（要検討）
プログラムの目標	・ SDGsの内容・背景にある問題意識・重要性・SDGsウォッシュという視点や危険性など、SDGsを理解する上で欠かせない基本的な考え方や内容を伝える ・ SDGsの視点を実際に自ら活用するワークを通して、SDGsに対する本質的な理解や、自分事として捉え行動を促す機会を提供する
授業時間	・ 150分程度（目安、小休憩など含む）
授業構成	・ 座学：30分程度 ・ ワーク：75分程度 ・ まとめ：10分程度

また、表-2 に本プログラムで扱う主な内容を整理した。事前課題は、SDGs を理解する上で重要な「持続可能性」という考え方に触れてもらうとともに、SDGs の 17 のゴールについて具体例も交えながら予習してもらう内容とした。

授業本番の座学パートでは、SDGs とその重要性をあらためて伝えるとともに、17 のゴールをその背景課題や具体例とともに解説する。例えばゴール 2「飢餓をゼロに」については、「農家が農業を無理なく続けられる」、「誰もがバランスの良い健康的な食事ができる」、「ご飯が余る場所と足りない場所があるなどの差が無い」といった、日本国内の課題や日々の生活と結びつけやすい具体例も挙げながら解説する形式とした。17 のゴールを解説した後は、「SDGs ウォッシュ」の考え方を取り上げる構成とした。具体的には、SDGs の取組を検討する時、誰かの SDGs 取組を見る時には、真に社会を変

² 三井住友海上火災保険株式会社の長野支店南信支社は、2022 年 4 月 1 日付の組織変更により、「長野支店南信営業支社」に名称変更となった。

える取組になっているか、ある特定のゴールから見た際には好ましくても、別のゴールから見た際には不適切な取組になっていないか、注意して見る必要があることを呼びかけた。

ワークは、1 グループ 4 人程度で実施する形式とした。グループワークで活発に意見交換してもらうために、冒頭では特に関心がある SDGs のゴールを説明しながら自己紹介をするアイスブレイクの時間を設けた。その上で、小学校での生活を SDGs の視点から見直し、「良いところ（強み）」と「もっと良くできるところ（弱み）」を考慮してグループ内で発表するワークを設定した。最後に、「もっと良くできるところ（弱み）」を「良いところ（強み）」に変えるために、どんなプロジェクトがあると良いか考えてもらい、グループ内で発表するワークを設定した。

表-2 各プログラムで扱う主な内容

プログラム	主な内容
事前課題	「持続可能性」の考え方 - SDGs17のゴールの内容と具体例
座学	- SDGsとは何か、その重要性 - SDGs17のゴール、背景課題と具体例 - SDGsウォッシュという視点と危険性
ワーク	- SDGsを使った自己紹介 - 小学校での生活をSDGsの視点から見直し、「良いところ（強み）」「もっと良くできるところ（弱み）」を考える 「もっと良くできるところ（弱み）」を「良いところ（強み）」に変えるためのプロジェクトを考える
まとめ	- SDGsを使って身近な課題を見直す大切さや意義 - 人の多様性の大切さと留意点 - 身近な地域での取組や計画の紹介

座学とワークを終えた後、まとめの時間を用意した。この時間で伝えることは主に 3 つ設定した。第一に、SDGs を使って身近な課題を見直す大切さや意義を伝える。具体的には、地域や世界の課題がバランス良く整理された SDGs を活用することで、持続可能な未来についての新しい発見や整理がしやすくなることを説明する。第二に、人の多様性の大切さと留意点を伝える。ここでは、SDGs を使って「もっと良い社会にしたい」と考え、行動すること自体は好ましいものの、他者に協力や理解を強要しないための注意が必要であることを説明する。人の多様性を重視し、相手の話を理解しようと試みること、自分ひとりではできないことが可能になったり、自分ひとりでは思いつかないようなアイデアが生まれたりする可能性について触れる。第三に、プログラムの対象者にとって身近な地域での取組や計画を紹介する。この部分は、プログラムを実施する小学校などの所在地によっても異なると考えられる。ただし基本的には、対象者にとって身近な地域における SDGs に関する取組や計画を紹介することが好ましいと考えている。

以上のように、今回開発したプログラムは小学校中～高学年のレディネスを十分に踏まえた上で、対象者にとって理解しやすい具体例を挙げながら SDGs の基本的な考え方を伝えるとともに、小学校での生活という身近な切り口から SDGs を実際に活用する内容となっており、SDGs を自分事として捉える機会を対象者に提供する教育プログラムとなっている。

3. ツール（ワークブック）の紹介

今回、開発したプログラムに付随して、事前課題、ワークブック、投影資料などを作成した。本稿では、対象者に配布するワークブックの一部を紹介する。

図-1 や図-2 に示した通り、ワークブックではイラストも活用し、対象者が読みやすく興味関心を持ちやすい形式となっている。裏表紙では、SDGs 授業を通して考えたことや学んだことを、身近な人と共有することを呼び掛けている。ここでは対象者が、授業が終わった後もワークブックを見返したり、授業の内容を他者に共有したりすることを目論んでいる。



図-1 「わたしたちの未来を考える SDGs ワークブック」表紙と裏表紙

図-2 では、文字だけでは伝わりにくい内容を、イラストを活用して説明しているページを示した。図-2 の左側は、SDGs とは何かを説明しているページである。最初から、SDGs とは国連が定めた国際目標であり、2030 年のあるべき姿を表したものであることを説明してしまうと、今回のプログラムの対象者には SDGs やそれを学ぶことの意義が伝わりにくいと考えた。そこで、小学校や地域での生活をもっと良くしたいと考えている架空の人物 A さんと B さんを例に挙げた。A さんは「学校の外に出て様々な人と関わるような授業が必要である」と考えており、B さんは「男だから、女だからと区別することが問題である」と考えている。こういった様々な課題をバランス良く検討する上で、役に立つのが SDGs である、と説明することで、SDGs の必要性やそれを学ぶことの意義の説明を試みた。図-2 の右側でも、SDGs を使って様々な課題や意見を整理できることや、地域を SDGs という視点で見ることで様々な発見の可能性があることを、イラストを活用して説明している。

1. 未来のための話をしよう

- 「小学校やちいさでの生活が、もっと良くなればいいのに」と思った時、まずは「どんな未来を目指せばいいのか」「そんな未来をつくるためにはどんな課題（もっと良くてできること）があるのか」整理することが必要になります。
- しかし「小学校での生活」「ちいさでの生活」と一言で言っても、本当に色々な課題があります。Aさんは「もっと学校の外に出て色々な人と関わる時間が必要だ」という話をすかもしれせんし、Bさんは「男だから、女だから、と言う風に区別することが問題だ」と話すかもしれせん。それでは、この色々な課題をバランス良く考えるにはどうしたら良いのでしょうか。



- そんな時に役に立つのがSDGs（エスディーゼス）です。



SDGs : Sustainable Development Goals
「持続可能（かのう）な開発目標」
…みんながずっとゆたかに生活していくための目標

- そういった時に、SDGsという、地域（ちいさ）や世界の課題をバランス良く整理したものを使うことで、いつもは考えない視点（してん）から、身近な生活や地域（ちいさ）の未来について新しい発見やアイデアが生まれるかもしれせん。

- そして、ちがう考えや視点（してん）を持つ人とも、SDGsを共通のアイテムとして使うことで、どのテーマについて話しているのか確認（かくにん）したり、目標にするべき未来について共通の考えを持ったりする時に役立ちます。

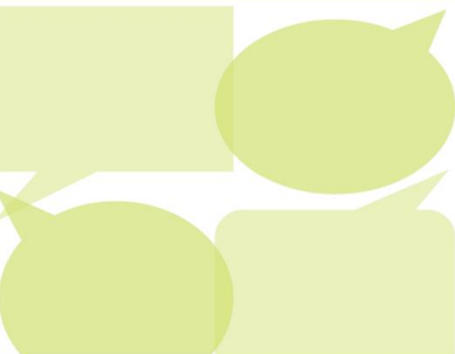


図-2 SDGs とは何かの説明ページ（左）、SDGs の活用方法の説明ページ（右）

図-3 では、プログラムの対象者が自由に考えや関心などを記録できるようにデザインしたページを示した。左側は、グループワークの内容を自由に記録できるページ、右側は 17 のゴールを身近な具体例とともに解説しているページである。右側に示したページでは、17 のゴールとその身近な具体例を示しており、それぞれのゴールについて対象者が自由に考えや関心を記録できるように作成した。

- グループのメンバーの発表が全員終わったら、出たアイデアについて話し合ってみよう。人のアイデアに対して、最初から「それはちがう」「まちがっている」を決めつけず、「○○さんのアイデアのここが良かった」「もっとこうしたら、さらに良くなると思う」「わたしのアイデアと○○さんのそのアイデアを合わせたら、良い組み合わせになると思う」というような、アイデアをふくらませるような意見交換（ごうかん）をしましょう。
- 良いアイデアだと感じたものなどを、ふきだしに自由にメモしてください。

グループのメンバーのアイデア



2. SDGsの17のゴール

- より良い未来のことを話し合うために、まずはSDGsの17のゴールにどんなテーマが挙げられているのか、学びましょう。ゴールについて気づいたことがあれば、「メモ」のところに自分が感じている課題、大事だと思った理由など、自由に書いてみてください。

17のゴール	身近な具体例	メモ
1 貧困をなくそう 生活のためのお金などが十分に	・ 小学校、体育館、図書館などをみんなが利用できる ・ 地震（じしん）や台風の被害（ひがい）を受けた時、みんなが生活を立て直すことができる	
2 飢餓をなくす 体に良いものが十分に食べられる社会に	・ 農家の方が無理なく農業を続けられる ・ みんなが米、野菜、果物などのバランスが良い健康的な食事ができる ・ ご飯があまる場所と、足りない場所があるなどの、場所による差がない	

図-3 グループワークのメモのページ（左）、SDGs のゴール解説のページ（右）

4. 伊那小学校 4 年生を対象とした実施事例

2022 年 2 月には、伊那小学校の 4 年生を対象に本プログラムを実施した。本プログラムにはグループワークが含まれるため、開発当初は座学パートを説明する講師も現地に訪問し、ワークの進行や必要に応じたファシリテーションを行う予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の状況を鑑みて、座学パートを説明する講師陣（インターリスク総研のコンサルタント）は東京から Web を介して参加することになった（図-4 参照）。

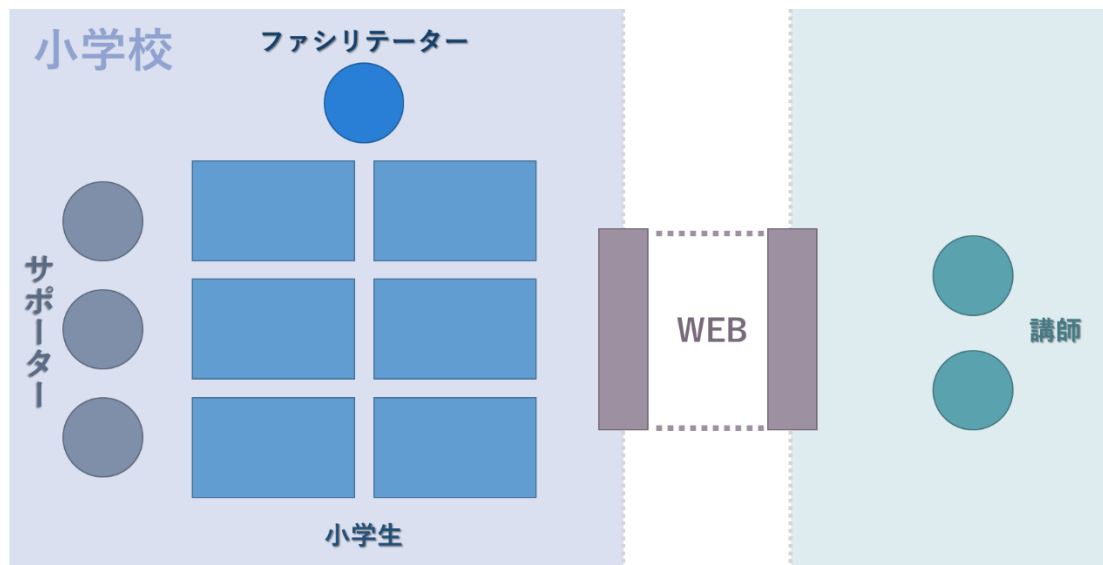


図-4 ハイブリット開催のイメージ図

講師は「座学」、「ワーク」、「まとめ」のパートの説明を担当した。現地では、クラス担任教諭らが中心となって、質疑の募集、ワークの運営やファシリテーション、各種サポートを行った。担任を務めている教諭が、場の雰囲気、ワークの進み具合などを見ながらファシリテーションを行うことで、間延びせず、生徒の顔、名前やキャラクターも踏まえた授業を実施することが可能になった。

以上を踏まえると、現地開催かハイブリット開催かという実施形態や、教諭らとの役割分担については、状況に応じて最適な方法を選択する必要があると考えられる。

授業実施後のアンケートでは、多くの生徒が今回の授業は興味を持てる内容であり、今回の授業を受けて SDGs に興味を持ったと回答していた。自由記述欄には、「色々な人の意見が聞けて良かった。」といった、グループワークを通して他者の意見を聞く機会への好意的な感想や、「SDGs を生活の中でも気を付けながら過ごしていきたい。」「SDGs に取り組むのは大事なことだと思ったけれど、中には簡単にゼロにできないものもあると思った。どのゴールにとっても大丈夫か、よく考えてから取り組むと良いと思う。」といった、SDGs を生活に紐づけたり、その難しさについて考察する感想も見られた。中には「伊那市の CO₂ 削減の取組に興味を持った。」といった、まとめで紹介した身近な地域の SDGs 取組に関心を持った感想も見られた³。

ただし、自由記述欄には、学びが多かったものの難しく感じた内容があったという感想も見られたため、プログラム全体の長さを変えないという前提に立てば、事前課題をより充実させることなどによる改善の可能性も考えられる。プログラムの改善については、提供する対象者に応じて適宜アレンジを行うことも視野に入れて対応する必要がある。

また、本件については、「SDGs 児童へも 伊那小 市主催で初の特別授業」という見出しで、伊那市の SDGs に関する取組や、ワークの内容とともに長野日報に取り上げられた。

³ 自由記述欄の回答は、個人の特定を防ぎ、記述内容を分かりやすくする目的から、筆者にて表現を変更した。

5. 今後の可能性

本稿では、小学校中～高学年を対象に開発した、SDGsを自分事として捉える機会を提供する教育プログラムを解説するとともに、伊那小学校での実施事例を紹介した。冒頭に述べた通り、SDGsの達成に欠かせないものとしてESDが注目されている文脈の中で、SDGsについて一方的に伝えるだけではなく、教育の対象者がSDGsを自らにとって身近なものとして捉えて取り組むきっかけとなるような授業プログラムを開発し、実施したことの意義は大きいと考えられる。

SDGsは、人びとがそれらを自らの問題として認識し、身近なところから取り組むことが鍵となる。地域の自治体、教育機関、その他のステークホルダーと協働しながら、本稿で紹介した授業プログラムのような、SDGsに関するアクションを促す取組を積極的に行っていくことが求められるであろう。

MS&AD インターリスク総研株式会社
リスクコンサルティング本部 リスクマネジメント第三部
サステナビリティ第一グループ 三島 らすな

MS & ADインターリスク総研株式会社は、MS & ADインシュアランス グループのリスク関連サービス事業会社として、リスクマネジメントに関するコンサルティングおよび広範な分野での調査研究を行っています。サステナビリティ第一グループ、サステナビリティ第二グループでは、気候変動、SDGs、ビジネスと人権などのテーマで、企業の取り組みを支援するコンサルティングサービスを提供しております。

コンサルティングに関するお問い合わせ・お申込み等は、下記弊社お問合せ先、またはあいおいニッセイ同和損保、三井住友海上の各社営業担当までお気軽にお寄せ下さい。

■ お問い合わせ先と主な担当領域

MS & ADインターリスク総研(株)

➤ リスクマネジメント第三部 サステナビリティ第一グループ

TEL.03-5296-8913 / kankyo@ms-ad-hd.com

- ・ 気候変動・TCFD対応水リスク
- ・ 水リスク
- ・ 自然資本（原材料調達、グリーンレジリエンス、TNFD対応）

➤ リスクマネジメント第三部 サステナビリティ第二グループ

TEL.03-5296-8974 / sustainability2@ms-ad-hd.com

- ・ SDGs（持続可能な開発目標）推進支援
- ・ 生物多様性（企業緑地）取り組み支援
- ・ 「ビジネスと人権」取り組み支援
- ・ サステナビリティ経営に関する体制構築・課題対応支援

本誌は、基本的に 2021 年度に MS & AD インターリスク総研株式会社と三井住友海上火災保険株式会社の長野支店南信支社が、伊那市役所および伊那市立伊那小学校と協力して開発した小学生向け SDGs 授業プログラムの content と、2022 年 2 月に伊那市立伊那小学校で実施した SDGs 授業の content や結果に基づいて執筆したものです。情報 content についての完全性、正確性、安全性、最新情報等について保証するものではありません。

本プログラムやそれに付随するテキスト等は、MS & AD インターリスク総研株式会社と三井住友海上火災保険株式会社が開発したものです。本誌に掲載した content やテキスト等を無断で転載することはお断りさせていただきます。

また、本誌は、読者の方々に対して企業の CSR 活動等に役立てていただくことを目的としたものであり、事案そのものに対する批評その他を意図したものではありません。

不許複製／Copyright MS & AD インターリスク総研 2022